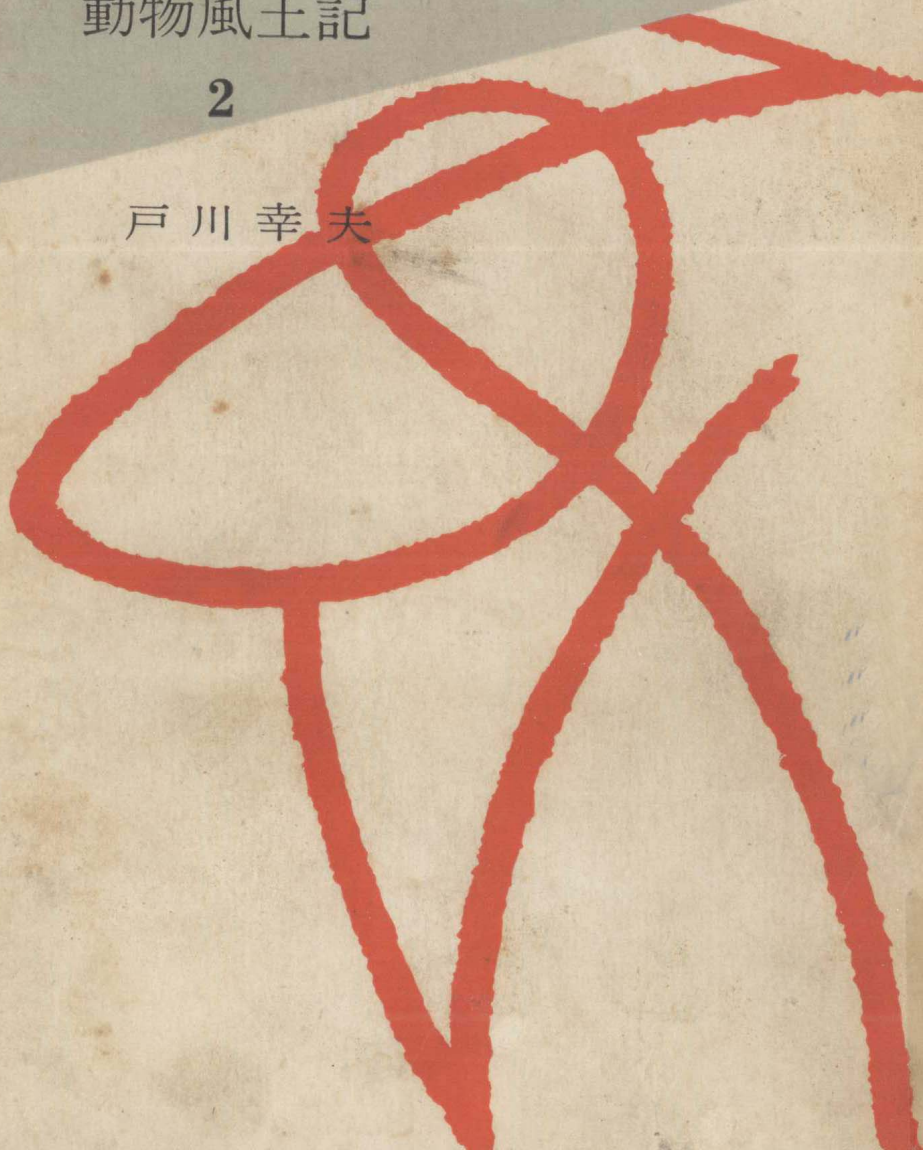


氷海に生きる

動物風土記

2

戸川幸夫



動物風土記 (二)

氷海に生きる



角川書店

氷海に生きる 定価二九〇円

戸川幸夫

株式会社 角川書店

角川源義

東京都千代田区富士見町二

振替東京一九五二〇八番

昭和三十年三月〇日初版発行

曉印刷株式会社

宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

氷海に
生きる

目

次

知床半島

吹雪

荒野の教室

親方の娘

孤独

霧と氷雨

野性へ

牙と爪

漂流

三人の男

二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一 〇

餓えの闘い

一六

番屋守

一八

新しき友

一五

仲間

一三

反逆の喜び

一四

雌雄

一六

春

一七

銀毛の殺し屋

一九

明るい海

二二

あとがき

二三

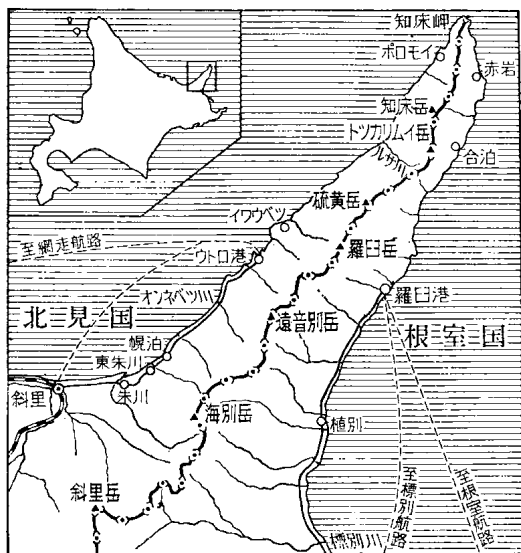
裴
幘

初
山

滋

氷海に生きる

— 動物風土記 —
⇒



知床半島

この半島に人類が最初の足跡を印したのがいつであるかはわからない。

ただ遠い遠い太古のころである、といえるだけだ。

しかし、今を去る七、八千年の昔、新石器時代の初期に、すでに人間が生活を始めていたという痕跡は今日はっきりと読みとることができる。

半島の基部に当る朱田西区の台地からは北海道新石器時代最古の土器形式に属する（と考えられている）綱紋式土器や朱田式尖底土器が出土し、これに伴って発見された遺物の中には石の刀、石の斧、石の矢じりなどがあった。これらの物からシベリア新石器時代初期の文化との類似性はきわめて濃いと学者たちはいつている。

こうした土器や石器を用いた人間が何人種であったかは今日ではわからない。アイヌでもなく、もちろん日本民族でもない。先住民族——という名で呼びうるだけの謎を秘めた人種であった。

この幻の民族はアジア大陸から千島、あるいは樺太を経て南下し、この半島に達して居つき、そこにオホーツク文化をもたらしたもののらしい。

そしてどうした理由からか、彼らは栄えた後に忽然と姿を消した。その後、また幾多の原始民族がこの半島に渡ってきた。

半島には汐の流れに乗って集る魚群や海獣が多く、鬱蒼と繁茂した原生林をひかえて生活は（寒いということ

を除けば）楽であつた。しかも断が絶壁で固められたここは天然の要害でもあつた。

原始民族たちはこの地で闘い、この地で結び、あるいは栄え、あるものは亡びた。興つては消え、消えては興り、来るものがあるように去るものがあつた。

そしてずっと後になってアイヌたちがここに一大城郭を築き、文化を誇つた。今日、半島北側の漁港ウトロに見られるチャシコツ（砦跡）は彼らの悲しい栄華の歴史を物語っている。

アイヌたちは、密雲に閉ざされた山脈を背骨とし、とどろくオホーツクのあら海に突き出したこの半島を「シレトック」と呼ぶ。それは彼らの言葉モシリバと同様に「大地の涯」を意味していた。

この半島は海底火山の活動によって造られたものと言われている。

それは地球上によりやく人類が姿を現わしはじめた新生代に當つていた。この時代はアルプス造山時代でもあつて地球上いたるところで激しい地殻の変動や火成活動が行われた。

今日われわれが世界の最高峰として仰ぐヒマラヤの諸連峰もこの時代に形成された。

新第三紀の末に北の海オホーツクの海底に激しい噴火活動が起つた。どろどろに焼けとろけた溶岩は海水を煮えたぎらせ、おびただしい黒煙と水蒸気を噴き出し、千島列島につらなる島嶼を築きあげたのであつた。

火山の活動はその後もながと続いた。休むことはあつても絶えることはなかつた。噴出物はやがて島と島との間を結びつけた。点は線となつて伸びはじめ年月がたつにつれ主陸に近づき、最後には接触して半島をつくり上げた。

これが北海道の東北端にある知床半島である。半島の地勢と資源とが、本質的に千島列島と似通っているのはその生成が同じであるからであつた。

半島が形づくられてからも火山の大爆発は続いた。そして半島のバック・ボーン（背骨）となつてゐる千四百メートルから千六百メートルに及ぶ峰々——斜里岳、海別岳、遠音別岳、羅臼岳、碓氷山、トッカリムイ岳、知末岳などの——を屹立させたのであつた。

これらの連峰は今日では硫黄山を除いては全く沈黙して死火山となっているが、それらがかつては硫黄山に劣らぬ激しい火山活動をなしていた証は山頂一帯に吹きつけている厚い層の硫黄に見ることができる。そして知床半島は今も生きて鼓動している。大地が死滅冷却をしていないことは六十年に一度正確に起る硫黄山の大爆発を見てもわかることであつた。

カルデラを白雲にさらしてごうぜんそびえている峻険な知床の山脈は、急激な傾斜の腕（尾根）を左右に張つて、おおぐろいオホーシツクの海に差し伸ばしている。

しかし、その腕はぶつつりと……いずれもぶつつりと……切斷されたトカゲの尾部のように……美しい調和を破壊して中途から無惨にもぎとられ、目をくらめかせる断が絶壁となつて荒海に落ち込んでいる。

半島はすなわち断ち切られた山岳であつて、その尾根尾根は妥協のないはげしい風や雲や雨や雪や嵐や、いたるところから噴出している地下水や、押し寄せる怒濤や、短い河川がつくり出した高い懸瀑などによつて残酷にえぐりとられ、犯され、へし曲げられていた。

知床には悠久の流れを示す美しい大河はない。川はすべて帰らざる川であり、段溪流と瀑布に限られている。

海岸線は低いところで二、三十メートル、高いところでは二百メートルをこえるであらう断がいによつて万里の長城のように続いている。浜辺とは長城のすそと暗礁との間にはさまれた幅数メートル―数十メートルのわずかな岩石地帯で、それも断続しているに過ぎない。

絶壁には地下水が浸蝕してうがったクソネ・ポールと称する大洞窟があつた。そこには何万というコウモリが群つていた。

牧畜や農耕に適する平たんな土地は半島の基部に近く、わずかにあるだけだつた。

日本人がこの半島にきたのは近世になつてからだ。蝦夷地のさいはての地であるここは千島の国後島にロシアの船が現われるまではだれも見向きもしなかつた。

蝦夷を支配していた松前藩ですら樺太同様の遠隔地として、アイヌたちの王国としてたまさかに交易船を出していた程度だつた。

弘化三年に探検家の松浦武四郎が樺太探検の帰途、宗

谷からこの岬にやってきた。そして安政五年に再び根室より半島を回遊して斜里に出た。

知床半島はようやく日本民族の前に姿を見せはじめた。そして今まで栄えたアイヌにとって代って半島の主導権を和人が握るようになったのは明治二十年以後のことであつた。

それから七十余年の歳月が流れて、半島に定着する和人の数も増えた。

しかし、それも半島の中ほどに開かれた二つの漁港までであつた。

二つの漁港は半島の中央部を走る知床山脈をはさんで右と左にあつた。

山脈は半島を二つの国に分ち、左岸、すなわち網走側を北見国。右岸、根室側を根室国としていた。

北見側の漁港はウトロと呼ばれ、一年前にようやくバス道路が通じた。斜里郡斜里町に属してはいるが、町というにはあまりにも寒々とした漁港で、開拓時代のアメリカ西部を思わせるたたずまいであつた。

ウトロという名称はアイヌ語のウトロチクシというの

からつけられ、それは「間の道」を意味していた。

アイヌコタンのはなやかだつたころ、彼らが丸木舟をあやつってオホーシク海に出漁し、遠くエトロフに交易をした根拠地としてウトロチクシは古くから知られていた。

ウトロ港に對抗するもう一つの漁港、根室側の羅臼は、地形の関係でウトロよりは早くひらけ、目梨郡羅臼村という村名をもっているが、この方がずっと町らしい風格を備えている。

バスは早くから通っており、村には小学校五校のほか中学校四校も点在し、旅館や映画館も飲食店も一応はそろつていた。

ここもアイヌ民族が栄えたところであつた。

和人たちはアイヌの行跡をなぞるようにしてこの二つの港を根拠地としてオホーシクの海に挑戦していった。

そうはいふものの、年間を通じて人間が生活を続けていられるのはこの二つの漁港までの地域であつた。

秋にはいると半島一帯はにわかに怒り顔になってくる。

海は荒れはじめ、雲ゆきは怪しくなり、間もなく雪と氷

がびっしりとはりつめて人類の生存を許すまいとするのだ。

ウトロと羅臼を根拠地としてオホーツクの海に生活をする人々は魚を求めて半島の先端部、知床岬の方へと少しずつ進出していった。

半島の沖合は宗谷暖流とリマン海流の合流点になっていた。オホーツク海の回遊魚とエトロフ、国後両水道を通過して半島北部沖合にくる太平洋回遊魚とはここで出合って大魚田をつくるのだった。

昭和のはじめだった。日本の駆逐艦の大和が網走沖合を走っていると、海の面が煮えたぎっているのを目撃した。

見張りについていた水兵は驚いて、このことを士官に報告した。

双眼鏡で見るとなるほど海面一帯が泡立ち海水の色も変っている。

海底の噴火かと、最初はびっくりした士官も黒煙や蒸気が噴き出していないのでようやく落つきをとり戻してじっと観察してみると、その泡たちは海面を移動してゆ

くのだ。

新兵器の出現か？ とすると大変だ、と艦を近よせてゆくと、それはおびただしい魚群のために起っていることがわかった。

見わたす限り魚の群であった。駆逐艦は魚群の背びれの上を走っているのであった。

艦長は急いでこれを報告すると共に艦名を取ってこの辺りを大和堆と名づけた。

そういう話が伝えられているように、半島には魚群が集った。サバ、イワシ、サケ、マス、マグロ、オヒョサ、サメ、コウナゴ、ニシン、ホッケなどの魚のほかにカニやタコ、イカもすぐとれた。またイルカ、クジラ、アザラシ、トドなどの海獣も群がった。コンブなどの海草も豊富だった。

人々はこれを求め、番屋と称する漁小屋をこの荒涼とした原始の世界につくって氷から氷までの季節をそこで暮した。

種田冬彦が、彼の祖父の長六と暮している番屋も、そういう番屋の一つで、小さなみすばらしいもので

あった。

冬彦が祖父の長六と暮している番屋はこの半島の突端に近く、ニカリウシと呼ばれる地域にあった。

突端部は知床岬といい有名な暗礁地帯で海中に屹立する風船岩は知床半島の名物岩になっていた。

この辺一帯は、いろいろな怪奇な形をした岩が多く、夏のほんのちょっとした間、もの好きに訪れる観光客をたのしませた。

しかし、それは沖合はるか遠くからながめるだけであつた。風船をふくらませたような面白い形の岩も、その上に棲息するウミウの生態の面白さについていかうかと近づこうものなら、たちまち船底はきばのように鋭い岩礁にかみ砕かれてしまうのだ。

奇岩怪石の面白い風景というのは一皮めくれば恐ろしい暗礁のわなが仕かけられているということにはかならない。

知床岬付近は常に風浪が激しかった。よく晴れた日でも岸に近づくと、至るところで白い泡が煮えたぎっている。

た。

ニカリウシの岸辺も、そういった奇岩怪石の奥にあつて、沖合から来た集荷船は近づこうとはしない。

長六は木造の小舟を一艘持っていて、これで集荷船と番屋とを結びつけていた。

集荷船は、夏の間は、天気さえよければ大抵毎日沖合に姿を現わした。

すると長六は、前の日に梱包しておいたコンブの包みを小舟に積んで、集荷船に運んでゆく。

ニカリウシの荒磯には長六の番屋のほかと同じようなコンブ番屋が二つと、網走からきたというマス漁業の大きな番屋が一つ建っていた。

長六は暗礁にふれないように沖まで張られたロープに伝わりながら小舟を出す。そうでないと舟はそこら一面に泡立っている暗礁に触れて粉々にされてしまうのだ。

沖に出てからも荷をいっぱい積んだ長六の舟はなんどもふくれ上った波の下に姿を消して、浜辺からは見えなくなる。

長六はことし六十八。年は取っていたが海に一生をた

たきこんできたその腕は確かなもので、あら波の間を小舟をあやつる技術にかけては彼にかなうものはなかった。イガ栗の頭髮は真白だが、そのほかのところは顔も胸も、両の腕も腿も足もまったくの赤銅色で、手足の太さ、肩や胸のたくましさは年齢からは想像できないほど力がみなぎっていた。

胴の間に、もうこれ以上一梱でも積んだら舟が沈むというほどコンブを満載して、あら波にさからって集荷船にこぎよせるのは長六でなければ出来得ないことであり、それが長六爺の自慢でもあった。

「やあ、相かわらず一杯つんできたのオ。爺さんの荷だと、ほかの舟の三艘分はたっぷりあるぞい」

集荷船の船長が大声で叫んだ。

長六は櫓を巧みにあやつりながら、

「そりゃあ、お前。八つの年から六十年、ずっと櫓は握りっ放しだでのオ」

これまた負けぬ大声で叫び返す。幅一間に迫った船ばたと舟ばたの間でも波はどよめいて少しの誤算も許さな

長六の舟は、うねりに大きく揺らいでいる集荷船に平行に近づく、うねりやゆらぎもちゃんと計算に入れて、びたりと横づけにした。

「今日は、またえれえ大層な梱数じゃないけ」

船員が梱をうけとるために船ばたに立ちはだかつて叫んだ。

「うん、天氣がよかったでな。三軒とも仕事の量がいった」

コンブの梱包みを集荷船まで運ぶのは長六の仕事だった。ほかの二軒の番屋の品まで彼は快く運んでやった。その代り干しあげたコンブを伸して巻く仕事は二軒の番屋でやってくれた。

コンブ巻きの仕事は老人か女の担当だった。男はあら海の底からコンブを刈りとって来る。それを石浜に干すのは子供の役目なのだ。

コンブの季節に入ると羅臼のコンブ業者たちは一家をあげて番屋に移動する。鍋、釜、七輪、炊事道具の一切からストーブ、布団、石油罐、米びつ、味噌樽、しょうゆ壺、犬猫や鶏まで——つまり冬の間を羅臼の漁港で過

した生活が、そのまま半島の原始境にもち越されるのであった。

違うところといえば電気がランプに変わり、子供たちにとっては学校に通う日課がなくなつて、その代りに二か月に一度ぐらい先生の方で授業にやってくる——そんなことであつた。

羅臼の家を釘づけにしたコンプ業者たちは夏のコンプ採取期間中を、自分らの手で建てた番屋に籠るのだ。

番屋は組合によって指定された地域に建てることになつてゐた。地域内ならばどこでもよかった。だから業者たちは日当りがよくて比較的風浪のこない、土砂くずれのおそれもない地点に造つた。小屋は二つに仕切られてゐた。一つはコンプ巻きの仕事場、そしてもう一つが一家の居間兼食堂兼寢室であつた。

大ていの番屋は老人と働き手の男たち、それに主婦や娘たち、子供とかなりの人手を擁している。

だが長六の番屋だけは違つてゐた。小さな一間っきりの小屋に長六は孫の十三になる冬彦とたった二人っきりで暮してゐた。

長六が刈つてきたコンプを冬彦は石原の上に長々と干した。

だからコンプ巻きの仕事はほかの二軒でやつてくれた。その代りに集荷船へ運ぶ役目を長六は受け持つてゐた。「おうい、コンプもじゃが、犬ッこことづかつて来なかつたかや？」

長六は船長にたずねた。

「犬ッ子？ そうそう、忘れるところじゃつた。うん、預つてきた。ええ犬じゃぞ。」

船が揺れたで少し酔うとるがの」

船長はそういつて船室にとつて返すと白毛の、四、五か月になる日本犬の子を抱いて現われた。

「おお、なるほどええ犬じゃ。目が生き生きしとるがの」

長六は目を細めてうれしそうに微笑むと、両の腕を伸して船長から子犬をうけ取つた。

子犬は両の耳がぴんと立つてゐた。毛は純白で、むくむくとしてゐた。鼻の先と両の目と、それから四本の肢の爪とが黒く、それが白毛の美しさを一そう引き立てた。